

鳥の影・柴田翔



鳥の影・柴田翔

筑摩書房

鳥の影

昭和四十六年十一月二十五日初版第一刷発行
昭和五十年八月十五日初版第三刷発行

著者 柴田 翔

発行者 井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話東京(二九)七六五一(代表)
振替東京六一四一二三
郵便番号一〇一一九一

装幀者 中島かほる

印刷 厚徳社
製本 和田製本

© 1971, S. Shibata

(分類) 0093 (製品) 80073 (出版社) 4604

目次

鳥の影	1
彼方の声	75
食堂の話	143
鏡の中	199

鳥
の
影

日曜日の午後的高校は、澄み切った空の下で、人影もなく静まり返っていた。正門と本校舎の間では、見覚えのある、低い、あおきの植え込みが、秋の陽光につややかに輝いていた。正門の前に立って、ゆっくりと振りむくと、幅広の、未舗装の、乾き切った黄色い土のバス道路の向うに、同じぼこぼこの黄色い土に黒っぽい緑のまじる野菜畑が大きく広がって、そこに住宅を点在させながら、ずっと遠くの団地や工場らしい建物の群れにまで続いていた。今、則雄たちを降ろしたバスは、その風景のなかを、土埃りをあげながら、西の方へと遠ざかって行った。バスの向うには、午後の斜光に薄青い影のように浮び上る、遠い山脈があった。

則雄は、そうした午後の静かな風景のなかに立って、ぼんやりと遠くを眺め、次第に身が軽くなつて行くのを感じた。時間が、彼から遠のいて行った。あたりの透明な大気が、彼の指の先から、やがて腕、四肢、身体にしみ通ってきて、彼を解き放った。見上げる彼

の眼に空の透き通った青が反射して、眩しかった。

「どっちへ行けば、いいのかしら」

妻の声に、則雄は我に返った。

「お母ちゃん、早く」

裕太が、待ち切れない様子で、母親の手を引っぱっていた。

則雄は、驚きに似た思いで、妻と子の顔を見た。枯葉色のワンピースを着た妻の宏子は、何故か眩しそうな表情で、彼の顔を見返した。

「お父ちゃん。行かないの。早く、行こうよ」

裕太は、宏子の手につかまったまま、よくまわらない口で、そうくりかえした。

「うん、今すぐ行くよ」

則雄はやっと、半ば機械的に裕太に答えながら、漸く、今の驚きに似た感情から回復して行った。

「そら」

則雄が笑顔で手をさし出すと、裕太はそれに喜んで飛びついてきた。則雄は、その小さ

な手を、彼自身思いがけなかったほど、しっかりとつかまえた。彼がつかまえた裕太の手は、まだ頼りなく、もろそうだったが、そのくせ、内側からの熱に燃えるように熱かった。

則雄は、裕太の手をひいたまま、正門のところから、右側に道をとった。今日の祝賀会会場になる生徒集会所は、その奥にあったはずであった。

「ここがお父さんの学校だよ」

「ふうん」

裕太は歩きながら、あたりの植込みや校舎を見まわした。

「広いなあ。ここ、ライオンや怪獣いる？」

「いるさあ。お父さんたちは、昔、ゴジラやマンモスとよく格闘したんだぞ」

「嘘だあ」

裕太は、そう言いながら、つないでいる則雄の手を、力一杯振った。だが、則雄は、手だけはそれに合わせて振りながら、過去の記憶への急激な斜面を滑り落ちて行った。

あの生徒集会所——。あそこで彼らは、本当に怪獣たちと格闘したのではなかったろうか。あの古ぼけた木造の洋館。それは、彼がこの高校の生徒だった十数年前に、既に今に

も倒れそうに朽ちて、彼ら若い生徒たちの乱暴で力のあるひと足毎に、ぎいぎいと力弱い悲鳴を挙げた。彼らはいつも、三時間目の休みに弁当を食べてしまったあと、昼休みになるとその集会所の狭い食堂で、立ったまま塩っ辛いラーメンをすすった。あるいは、グラウンドでサッカーのボールを蹴り続けた午後おそく、すっかり夕闇の忍び込んだ集会所の片隅で、菓子パンと牛乳をものを言う間もなくむさぼった。のどのところのひと塊を吞み下し、大きく息をついた時、ふと見上げると、埃りに汚れたガラス窓の向うで、雲が残照に染って、血のように赤く燃え立っていたこともあった。

「ぼく、お母ちゃんのところへ行く」

その時、裕太が突然そう叫ぶと、則雄の手をふり切って、うしろの宏子の方へ行った。

集会所への道は変っていなかった。本校舎の風雨にさらされて黒ずんだざらざらのコンクリート壁が左側に直立し、右側はそれに不釣り合いな美しい植込みが続いた。そして、やがて行手に立つ木々の葉の隙間から鉄骨を組み上げた無骨な体育館が見えた時、記憶のなかに沈んだまま、ひとり歩いてきた則雄は、急に何かに胸をつかれた思いで一瞬立ち止まり、幼い息子をつれてついてくる妻の宏子の方を振り返った。則雄は、さびた鉄骨がむ

き出しに並んでいるその様子に、感動とも不安ともつかない感情に襲われたのだった。宏子は、彼の気配に自分も足を止め、彼が何かを言い出すのを待つ表情になった。が、則雄は、自分が何を言えばよいのか、判らなかつた。彼はただ、妻に無意味にうなずいてみせると、集会所を指して、足を早めた。

道は、一度、校舎の壁が折れるのに従つて左へ曲つた。その先をもう少し行くと、左側の校舎の壁が再び切れるところで、今度は逆に右へ曲がり、そこから、二、三本の、あまり高くない杉の木立の脇を通つて、ゆるい坂を四、五十メートルも下りると、生徒集会所に達するはずだった。則雄たちがその二度目の曲り角に近づく、右側の植込みから、こじゆけいが一羽現われて、頼りなげな鳴声を挙げながら、彼の前の空間を斜めに横切つて、左側の校舎の陰に消えて行つた。

「ほら、ほら、鳥よ——。裕太君たちが来たから、驚いて飛んでいってしまった」

彼のうしろで、妻が息子の裕太に話しかけた。が、裕太は、まわらぬ舌で、妻の言葉に逆らつた。

「ううん。違うよ」

「あら、裕太君、見なかった？　鳥がいたのよ」

「ううん。違うってば」

裕太はもどかしげに地団太を踏みながら母親の言葉を否定すると、手をひかれたままその場に立止ってしまい、今こじゅけいが出てきたあたりの植込みを、真剣な顔で見つめた。その時、裕太の見つめる植込みのあたりで、音がした。よく見ると、その植込みのなかで、一羽の尾長が、何かついばんでいるのだった。そして、更に二、三羽の尾長が、右手の杉の木立から、その白い腹と灰青色の美しい尾を見せながら、さっと舞い降りてきて、そこに加わった。

「ほら。違うよ。ぼくたちじゃないってば。あの鳥たちだよ。あの鳥たちが、さっきの鳥を追いはらったんだよ」

裕太が、また繰返した。

「あんなきれいな鳥が？」

宏子は驚いたように声を挙げ、美しい尾を立てて植込みの下を歩きまわる尾長たちを見た。その少し高い声が、尾長たちを逆に驚かせたのだろうか。そのなかの一羽が、急に、

聞耳を立てるかのように、黒い頭をきつと持ち上げると、次の瞬間夢にうなされた老人の悲鳴のような醜い叫び声を、一声、ぎゃあと響かせながら、則雄たちの前の静かな空間を横に切り裂いて、飛び立った。残りの数羽もすぐにけたたましく醜く鳴き交わしながら、灰青色の尾を再び初秋の午後の日差しに光らせて、それに続いた。

校舎の端まで来ると、則雄は、道に沿って右へ曲がり、杉の木立の下のゆるやかにカーブする道を、だらだらと降りて行った。そして、木立の脇を通り過ぎて、ふと顔を挙げた時、彼は驚いて立ち止った。道は、すぐ五メートルばかり先で急に途切れ、そこに真新しい、粗いコンクリートの壁が大きく立ちふさがっていた。それは、まだ建ちかけの四、五階建ての建物の壁で、頑丈な鉄パイプの足場が、白くざらついた壁に沿って組み上げられていた。日曜日の工事現場に人気はなく、正面に据えつけられた小型のコンクリート・ミキサーは、永遠の昔からそこにそうあり続けたかのように、錆とこびりついたコンクリートの汚れを見せて静まり返っていた。

彼の生徒集会所は、どこへ行ったのか。則雄は、突然、自分の心に激しく問うた。それはあるとすれば、その奥にあるはずではないか。だが、白い粗い壁が、彼の目の前を完全

にさえぎっていた。工事現場のまわりには、資材が積み上げられ、裏へまわる道はなかった。それに、ことによったら、彼の生徒集会所は、まさに、今この建ちつつある建物があるところにあつたのではなかったろうか。それとも、彼の生徒集会所は――、そうしたものは、もともと、決してありはしなかったのだろうか。

「変だな」

彼は妻と子と自分に、そう呟いてみせ、暫く、迷っていたが、あたりには、たずねる人も見当らなかつた。仕方なく正門の方へ引きかえしながら、先程、尾長が飛び立った植込みのあたりを通り過ぎた時、背後のグラウンドから、さっきは気づかなかつたサッカーのボールの蹴上げられて高く飛ぶ音と、それを追って走りまわる生徒たちの熱っぽい叫びが、風に乗って、急にはっきりと聞えてきた。

正門に戻り、たまたま通りかかつた小使にたずねてみると、則雄の間違ひは簡単に判つた。古い生徒集会所は昨年取りこわされ、案内状にあつた生徒集会所とは、その代わりに建つた新しいものことなのだった。それは、そうと判れば、それだけのことに過ぎない。彼は小使に、新しい生徒集会所の位置を教えてもらい、裕太の手をひいて、先程とは逆の

左側の道を、漸く少しばかり本気で急ぎ足になって、歩いて行った。

実を言えば、彼らは今日の会の定刻に、とうに遅れているのだった。一時からの潮田先生古稀祝賀会は、三時までの予定だから、もう半分近く済んでしまっていた。だが則雄には、もともと、折角の日曜日の午後を、まるまるその会で潰してしまうつもりはなかった。というより、もともとは、その会に出席するつもりは全くなかったのだが、ただ今朝になって、息子の裕太に、どこかに連れて行くことをねだられた末、窮余の一策として、ここに来たのだった。

彼は、一週間のうち六日を、終日、忙しく暮していた。三十代の半ば、課長代理という勤め先での地位が、彼にそれを強いた。それは彼にとって、有利でもあれば、不利でもある位置であった。同期のトップを切って課長代理に昇進した彼は、これ以後つねにトップを駆け続けなければならない宿命を負っていた。しかも三十代は、将来にむけて、仕事のための勉強を、いくらしても追いつかない時期であった。課長代理として、係長である同期の連中より一段と忙しい彼は、また、他より一段と勉強し蓄積しなければならなかった。そして彼は、口では忙しいとこぼしながら、内心、そうした忙しさに、誇りを感じ、かつ

そこに自分の人生の充実を感じていた。彼は七日毎の日曜日も、半ばは週日なおざりにしている家庭のために使い、半ばは自分の勉強のために使った。時としては、それすらできずに、出勤しなければならぬこともあった。そうした彼の生活には、わざわざ昔の高校の教師のために時間を浪費する余裕はなかったし、また、少年時代を懐古することで現在の生活の空しさを慰める必要もなかった。高校時代の同級生で、今はそこに英語の教師となつて戻っている山本から、この会の通知が来たのは、一カ月ばかり前のことだったが、彼はすぐに、欠席のところに丸をつけ、盛会を祈ると一行書き加えてポストに放り込んだ。一週間程前、集まり具合を心配した山本が、何年ぶりの電話を特別にかけてきた時も、妙にねばる山本を、できれば行くと言葉を濁してあしらったが、實際出かけるつもりは少しもなかったのだった。

今日、彼がそれにもかかわらず、ここに来てゐるのは、従つて、ほんの偶然の思ひつきからに過ぎなかった。今朝、久しぶりに家にいる父親にまわりついた裕太が、何処かに連れて行ってくれとねだった時、彼は、じゃあ、いいところに連れて行ってやると、五歳の息子を高く抱き上げながら、ふとこの会のことを、というよりは、自分の高校のことを

思い出したのだった。何処かに連れて行ってやらねばとは何週間も前から思いながら、休日の遊園地やデパートの混雑を考えると気が重くなっていた彼には、それが天啓の思いつきと思えた。彼は、自分が少し遅れて会に出ている間の一時間ばかりは、宏子に、裕太をグランド校舎のまわりで遊ばせて待ってもらい、そのあと三人で街へ出て、食事をする予定を立てた。それは、裕太を満足させると共に、日頃ゆっくり相手することのない宏子への多少の慰労も兼ねる計画であつた。

だが、しかし、それにしても、彼は何故今日の会合のことを覚えていたのだろうか。少し早足で、新しい生徒集会所への道を急ぐ今、則雄はふと不安にかられるような感じで、そのことを考えた。返信用葉書に欠席の印をつけてポストに放り込んだことで、もうそれは忘れてしまつていいはずのことではなかったか。山本からの電話も、切つてしまえばそれで済んだはずではなかったか。そうしたことを記憶にとどめておくほど、彼の生活に關はないはずであつた。それなのに、何故今朝、ふと記憶の底から、潮田の祝賀会が浮び上つてきたのか。歩きながら、また急に黙り込んでそう考える則雄の顔を、明るい透明な空間を滑る鳥の影が横切つて過ぎた。